

## 「外国人児童生徒」教育におけるアイデンティティに関する一考察：中国帰国児童生徒教育と「在日朝鮮人」教育から

福畹, 智  
九州大学大学院：博士後期課程3年

<https://doi.org/10.15017/1036>

---

出版情報：飛梅論集. 3, pp.161-173, 2003-03-28. 九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻教育学コース  
バージョン：  
権利関係：

# 「外国人児童生徒」教育におけるアイデンティティに関する一考察

—中国帰国児童生徒教育と「在日朝鮮人」教育から—

福 嶋 智\*

## はじめに

筆者はこれまでに、従来の中国帰国児童生徒教育研究が言語教育、学業不振、学校における不適応などを主たる分析対象としており、その視点が静的・固定的文化観に基づくものであることを指摘してきた<sup>(1)</sup>。同時に、かれらに関わる教育課題を解決するためには、動的な文化観に基づいたアイデンティティ形成への視点が必要であることを提示してきた。すなわち、国民国家と対応する文化を措定し、そこに各個人をカテゴライズすることの誤謬を指摘してきた。

日本社会で生活するいわゆる「外国人」のなかで、とりわけ国家と関連づけられて捉えられてきたのが在日朝鮮人<sup>(2)</sup>であるということがいえよう。在日朝鮮人は、一般的には「在日韓国・朝鮮人」と呼称されてきた。その背景には、厳然として、韓国、(北)朝鮮という国家が存在する<sup>(3)</sup>。同時に、日本社会におけるかれらへの差別、偏見がかれらのアイデンティティ形成に影響を与えていることがこれまで指摘されてきている<sup>(4)</sup>。また、かれらに関わる教育に関する研究は、民族学校における「民族教育」の範疇にとどまらず、日本の公教育のなかでのかれらの民族教育の位置づけを、「多文化教育」、「共生のための教育」などと関連させながら模索しているといえよう。

一方、中国帰国児童生徒教育はこれまで、ニューカマーに対する教育として位置づけられてきたといえるであろう。このことは、かれらが「抱えている」とされる課題が、「日本語習得」、「学力」、「適応」などであると考えられてきたためであると思われる。しかしながら、かれらが「抱える」とされている課題とは、日本の学校の「常識」を基準として周囲が判断したものなのである。そのような日本の学校の「常識」を中国帰国児童生徒へ意図的もしくは無意図的に押しつける「同化圧力」が、かれらのアイデンティティ形成に多大な影響を与えているのである。しかしながら、かれらのアイデンティティ形成に関する研究はほとんどなされてきていない。定住化が進んでいる状況を背景として、かれらに関わる課題が、異文化接触状況下での人間形成に基づくものへと変化している。すなわち、このような視点からは、ニューカマーに対する従来の「対症療法的」な教育からの転換の必要性が導き出される。

そこで本稿においては、外国人児童生徒教育においてアイデンティティ形成が持つ意味を、オールドカマー（オールドタイマー）である「在日朝鮮人」に関わる研究と、ニューカマーとされる中

\*九州大学大学院博士後期課程3年

国帰国児童生徒に関わる研究と連関させながら検討する。

筆者の中国帰国児童生徒に関わる一連の調査からは、国民国家がアイデンティティ供給システムとして作用している一国籍や言語、国家と対応するような幻想としての「文化」という従来のアイデンティティ概念において、「核」となる要素を供給する一という従来の視点では、捉えられないかれらの現実の姿が明らかとなった。そこで、近年のポスト・モダンのアイデンティティ論、すなわち、国民国家を軸とした本質主義的アイデンティティ論への批判から生まれた新たなアイデンティティの理論枠組みを概観する。その際、カルチュラル・スタディーズの旗手といわれるホールの論考（1990/1998、1996/1998、1996/2001）を中心とする。

このような新たなアイデンティティ概念の導入は、オールドカマー教育研究、ニューカマー教育研究の共有されうる基盤となる視点をもたらすと考える。すなわち、国家や予め指定された静的な文化に縛られた従来のアイデンティティ概念からは、「定住－非定住」と「同化－異化」という二項対立的な尺度の組み合わせによるカテゴリーが導き出され、カテゴライズされるにとどまる。動的な文化という視点に基づくアイデンティティ概念の導入によってはじめて、かれらの現実の姿が明らかにされうると考えられる。同時に、動的なアイデンティティという視点から描き出されたかれらの現実の姿から、その全体像を描き出す試みが求められるのである。

そこで本稿においては、ホールの論考（1990/1998、1996/1998、1996/2001）をもとに、外国人児童生徒教育におけるアイデンティティの理論的視座を得ることをその目的とする。そして、そこで得られたアイデンティティ概念から、筆者が中国帰国児童生徒たちの現状を分析するための枠組みとして用いてきた、石川（1992・1996）の「存在証明」概念および、中村（1990）の「自己過程」概念の再検討を行う。また、同時に、そのような視点から在日朝鮮人および中国帰国児童生徒教育に関する言説を分析する。これらの作業を通して、外国人児童生徒教育において、アイデンティティ形成に着目した研究がもつ意義を考察する。

## 第1章：関係性としてのアイデンティティ

ここでは、ホール（1990/1998、1996/1998、1996/2001）、テイラー（1994/1996）、石川（1992、1996、2001）、中村（1990）らのアイデンティティに関する論考をもとに、外国人児童生徒のアイデンティティ形成の理論的枠組みを検討する。

ホールは従来のアイデンティティ概念について、以下のように批判している。

（ホールの新しいアイデンティティ概念とは）多くの他者の内側に隠れている集団的もしくは真の自己、共通の歴史と祖先を持つ人々が共有している、もっと表面的で人工的に与えられた「自己」、不変の「ひとつのもの」、他のすべての表面的な差異の下にある文化的な帰属を安定させ、固定し、あるいは保証する自己でもない

（ホール・1996/2001・12頁）

このようにホールは、従来のアイデンティティを本質主義的に捉える視点を批判している。すなわち、これまでの「自我の安定した核」としてのアイデンティティという捉え方を捨て去るべきであると主張している。ホールが批判する従来のアイデンティティ論における論点は、「本当の自分」(real me) の存在を措定したものであったとすることができるであろう。

そしてまた、アイデンティティの概念について以下のように述べている。

「われわれは誰なのか」「われわれはどこから来たのか」が問題なのではない。重要なことは、われわれは何になることができるのか、われわれはどのように表象されてきたのか、他者による表象が自分たち自身をどのように表象できるかにどれほど左右されているのかということである。

(ホール・1996/2001・12頁)

ここでのホールの主張は、アイデンティティとは社会において、そしてその権力関係において、他者とのせめぎ合いのなかで形成され続けるものであるという捉え方を可能にする。このことは、ホールの次のような主張からも裏付けられる。

アイデンティティは、いつも語られていることとはまったく反対に、差異の外側においてではなく、差異を通して構成される。……(中略)……「アイデンティティ」が構成されるのは、大文字の他者との関係、自らとは異なるものとの関係……(中略)……を通してのものである。

(ホール・1996/2001・13頁)

ホールのアイデンティティに関わる論考からは、次のようなことを読みとることができる。まず第一に、安定して一貫性を持つ自己とはおとぎ話にすぎないという点である。すなわち従来のシンボリック相互作用論において議論されたような、文化的世界を統一的なかたちで主体が内面化するというような概念を否定する。第二に、主体は自己の表象のされ方に応じて、すなわち置かれたコンテキストに対応して、複数あるアイデンティティのなかから、あるアイデンティティを一時的に選択するという視点である。第三に、アイデンティティとは、表象の外側ではなく内側で構成されるものであり、それは常に過程にあるものであるという視点である。

また、このような他者との関わりかたについて、テイラー (1994/1996) は以下のように述べている。

我々は常に、重要な他者が我々の内に見出したいと欲する事柄との対話を通して、そして時にはそれとの闘争を通して、自らのアイデンティティを定義づける。

(テイラー・1994/1996・48頁)

私が私自身のアイデンティティを発見するという事は、その発見が孤独のうちに達成されることを意味するのではない。それは私が他者と、一部には公然とした対話を通して、一部には内面の対話を通して、アイデンティティを取り決めることを意味する。……(中略)……私自身のアイデンティティは、私と他者との対話的な関係に決定的に依存しているのである。

(テイラー・1994/1996・50頁)

ホールは、アイデンティティを静的で統一されたものではなく、動的で重層的なものであると捉えている。それを可能にしたのは、国民国家<sup>6)</sup>や、国民国家と対応するような文化といったものを本質的なものではないとする捉え方である。このような捉え方は、同時に、アイデンティティが他者との関係を通して—テイラーのいうところの「対話的 (dialogical)」過程を通して—形成され続けるという視点を導き出す。

このように、アイデンティティ形成における他者との「対話」の場面で行われるのがアイデンティティ・ゲームであるといえよう。そこでは、石川 (1992・1996) がいうところの「アイデンティティ管理」、「存在証明」が試みられているのである。石川 (1992) は、「人は、価値あるアイデンティティを獲得し、負のアイデンティティを返上しようとして、日々あらゆる方法を駆使」していると述べ、これを「存在証明」と名付けた。そして、その戦略を表1のように分類した。

表1 石川による「存在証明」の四分類

I. 印象操作	人は、知られると否定的に評価される負のアイデンティティを隠し、価値あるアイデンティティの持ち主であるかのように装う。
II. 補償努力	価値あるアイデンティティを獲得することで、否定的な価値を持った自分を補償する。
III. 他者の価値剥奪	差別することにより人から価値を奪うことにより存在証明を達成する。
IV. 価値の取り戻し	社会の支配的な価値を作り替えることによって、これまで否定的に評価されてきた自分の社会的アイデンティティを肯定的なものへ転換。

\*石川 (1992,1996) より筆者作成

この石川の「存在証明」における重要な概念は「価値」といえるであろう。そしてここでの価値概念とは、各個人が形成してきた価値概念が他者との「対話」において再構成され、再構築され続けるものであると捉えることができるであろう。このような「存在証明」を試みる際のプロセスは、自己の内面との「対話」と他者との「対話」が交錯しながら行われているということができよう。そこで、この一連のプロセスを、中村 (1990) の「自己過程」の概念を援用しながら検討する。

中村（1990）は「自己過程」を表2のような4位相に分類した。

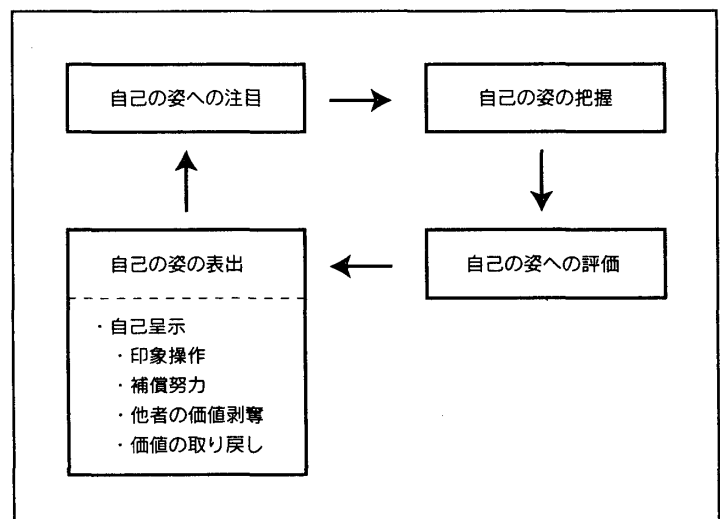
表2 「自己過程」の四位相

自己の姿への注目	「自己注目(self-focus)」
自己の姿の把握	「自己像(self-image)」
	「自己概念(self-concept)」
自己の姿への評価	「自己評価(self-evaluation)」
	「自尊心(self-esteem)」
自己の姿の表出	「自己開示(self-disclosure)」
	「自己呈示(self-presentaion)」
	→印象を操作・管理

中村（1990）15頁～18頁より筆者作成

中村（1990）によれば、「自己注目」により自分の外観や心理的状态、他者との社会的関係などに注目し、それらに注意の焦点を当てることから自己の心理的・社会的問題が始まるという。また、「自己注目」に関して押見（1990）は、その状況の性質との相互作用へ注目する必要があると述べている。「自己の姿の把握」は、「自己注目」の対象となった自分の状態、すなわち自己の特徴や属性に関する知識を獲得し、自己に対する認知を形成する過程の段階である。「自己の姿への評価」の段階においては、自己評価する際の評価基準言い換えれば、他者と比較する場合の他者との関係が問題となる。そしてこの自己評価が、石川（1992・1996）のいう「存在証明」や「自己呈示」の方向性を決定するのである。そして、「自己過程」は、「自己の姿の表出」で完結するわけではない。この「自己の姿の表出」すなわち「自己呈示」を行い、それに対する他者からの反応をもとに、自己と他者との関係性への認識を再構築し—自己評価のための評価基準の再設定を行い—、再度、この「自己過程」を経るのである。そしてこのような循環する「自己過程」（これを「自己過程のサイクル」と名付ける）こそ、アイデンティティ形成過程であるということができよう。このことを図に表すと右図のようになる（図1）。

図1 自己過程のサイクル



ここまで、ホールおよびテイラーのアイデンティティをめぐる一連の論考から、ポスト・モダンなアイデンティティ概念を紡ぎだすことによ

り、本質主義に陥ることのない動的なアイデンティティ概念の可能性を検討してきた。ここでは、以下のような点が明らかとなった。すなわち、従来の統一的で安定した「核」であるというアイデンティティ概念では、社会における他者とのせめぎ合いの関係性を明らかにすることは不可能であり、主体が置かれた状況によって複数あるアイデンティティのなかから表象するアイデンティティを選び取っているという捉え方によってはじめてそれが可能になるのである。そして、そのような動的、重層的なアイデンティティ概念からは、「アイデンティティ管理」や「存在証明」という捉え方が導き出されるのである。

以下、この動的なアイデンティティ概念をもとに、日本におけるオールドカマー（オールドタイマー）である在日朝鮮人教育およびニューカマーである中国帰国児童生徒教育における動的アイデンティティ概念導入の持つ意味を検討する。

## 第2章：在日朝鮮人のアイデンティティ言説と「対話的作業」

本節においては、在日コリアンの「若い世代」（福岡・1993）のアイデンティティに関する代表的な研究であるとされる<sup>6)</sup>福岡（1993）をもとに、在日朝鮮人のアイデンティティに関わる言説を検討する。

在日朝鮮人への聞き取り調査を中心に、そのアイデンティティ状況を明らかにすることを試みている福岡（1993）は、その調査から以下のような2点を指摘している。まず第一に、「『葛藤』タイプの遍在」（福岡・1993・79頁）である。福岡は、これまでの「日本人研究者」の論文における、「在日韓国・朝鮮人の一世は、日本への恨みと祖国への望郷の念を抱きつつ生きてきた。二世は、差別と貧困の体験にもめげず、必死に日本社会で生活基盤を築いてきた。そして、今や三世は、さほど問題なく日本社会への適応をはたしている」（福岡・1993・77頁-78頁）という記述に対して異議を申し立てる。そして、現実の「在日」の若者たちの大多数の姿として、「どのように生きていったらいいのか、出口のみつからない混迷状態」（福岡・1993・79頁）にあると述べている。

また、第二点として、「在日」の「若い世代のアイデンティティの模索のありようは、もっと多様化している」と主張している。すなわち、従来の「在日」のアイデンティティの捉え方を、「『民族意識』を強固に維持していこうとするタイプと、日本社会への『同化』を強めていくタイプ」という構図で捉えてきたことを批判している。

この福岡の一連の調査から導き出された指摘は、「日本人研究者」による在日朝鮮人言説の生成、在日朝鮮人のアイデンティティの多様性の確認という点においては首肯できる。しかしながら、このように在日朝鮮人のアイデンティティの多様性への認識の必要性を主張する福岡であるが、「どのように生きていったらいいのか、出口のみつからない混迷状態」と述べている点については疑問を差しはさまざるを得ない。この点について、福岡は、「調査の結果えられたファインディングス」として述べている。しかしながら、福岡がこのような「混迷状態」にある「葛藤タイプ」はその後の事例においては描き出されていない。

また、福岡の一連の研究においては、さまざまな理念型が示されている。すなわち、①同化－異化志向、②無葛藤－葛藤－脱葛藤、③祖国－共生－個人－帰化志向、④同化意識である。福岡(1993)においては、これらの尺度とカテゴリーの側面を持つさまざまな概念が混乱しているといえることができるであろう。すなわち、③祖国－共生－個人－帰化というカテゴリー化のためと思われる概念と、②無葛藤－葛藤－脱葛藤というプロセスを示す概念が混在している。

このような混乱はなぜ生まれたのであろうか。この点については、福岡自身の叙述の中にその答えが求められよう。

もちろん、現実の個々人がいずれかのタイプにぴったりと納まりきるなどということは、ありえない。現実の諸個人は、生身の人間として、複数のタイプの要素を分有していることのほうが、むしろ通常だ。

(福岡・1993・106頁-107頁)

福岡自身、このように述べているにもかかわらず、予め指定した理念型の中に在日朝鮮人をカテゴライズしているのである。福岡が行った聞き取り調査から浮かび上がってくる多様な「在日」の姿を、予め指定した理念型へと当てはめようとしたためにこのような混乱がおこっていると思われる。すなわち、便宜的に分類するためのカテゴリーが、現実の「在日」の多様な姿を制限してしまうのである。ここでの福岡のような、予め指定した理念型へのカテゴライズは、福岡自身が批判する「日本人研究者」による言説生成へとつながる危険性を孕んでいる。

ホールのアイデンティティ論からは、在日朝鮮人のアイデンティティを明らかにするためには、他者からのかれらへの働きかけがどのように行われ、すなわち、表象され、それによってどのように「他者としての自己の内面化」(ホール・1988/1998)がはかられているのかを検討することの必要性が導き出されるのである。つまり、石川(2001)がいうところの「局所的リアリティ」の積み重ねが、まず求められているのではないだろうか。

石川(2001)は、この「局所的リアリティ」を語ることの危険性－「独特の『文化』として商品化され」、「一部の『オリエンタリスト』」によって消費される可能性－を認めつつも、以下のように述べている。

局所的リアリティだけを語るというのは、じつは語りの説明責任(アカウントビリティ)をうまく回避するための自己防衛的な方法である。……(中略)……だが、多様な局所的現実の関係や配置を認識するためには全般的視点が必要である。そのためには、複数の局所的現実を出し合って、それらを付き合わせて一つの地図を作り上げていくという「対話的作業」が要請される。そうしてできる地図は、従来の地図をいくらかなりとも書き直すことに繋がる。

(石川・2001・159頁)



### 第3章：中国帰国児童生徒のアイデンティティ形成

本節においては、ニューカマーであるとされる中国帰国児童生徒教育に関わる言説について検討する。

中国帰国児童生徒教育研究において、アイデンティティ形成を中心としたものは数少ない。このことは、中国帰国児童生徒に関わる教育課題が「適応」を中心としたものとなっていたためであろう。すなわち、かれらが直面しているとされる課題—言語習得の困難さ、低「学力」、学校への「不適応」—への対処が求められ、それへの対応が中心とならざるをえなかったと思われる。

宮田（1998）は、「外面は一応周りに合わせておいて、内面の世界では、日本的な価値観、人間関係に違和感を持つというケースが生じる」と述べている。ここでは、国民国家を措定した「日本文化」および「中国文化」が設定されている。そのような二項対立的な構図において、中国帰国児童生徒はそのどちらかへのカテゴライズされると同時に、自己カテゴライズ化を強いられることになる。また、清田（1999）は、「日本人」生徒と、「中国帰国」生徒を「多数派言語（日本語）集団」と「少数派言語（中国語）集団」として対置させている。

このような、日本と中国という二項対立的な構図は、中国帰国児童生徒たちのアイデンティティ形成の「現実」の姿を覆い隠すだけではなく、かれらが重層的なアイデンティティからあるアイデンティティを選び取るという過程において、その選択肢を狭めてしまっているのである。換言すれば、このような構図こそが、かれらが置かれたコンテクストにほかならないのである。

一方、このような二項対立的な構図とともに、中国帰国児童生徒イコール日本人という視点も存在する。その原因として、蘭（1998・2000）は、中国残留邦人が「日本人」であるがゆえに日本国は受け入れ、そのうえで、「彼らは本当の日本人になることを期待され義務付けられている」と指摘している。すなわち、二項対立的な「日本人なのか中国人なのか」という構図ではなく、「日本人らしさ」という尺度によりかれらを捉える構図である。

このような二つの構図は、中国帰国児童生徒たちの多様性とはかけはなれたものであるといわざるを得ない。かれらは、来日年齢や滞在年数、家庭や学校における言語の使用状況（カミンズがいうところのBICS、CALPを考慮に入れたうえでの）日本語および中国語の能力、生活習慣の保持の度合いなど非常に多様な背景を持つ。このようなかれらの多様性は、「中国帰国児童生徒」としてかれらをカテゴライズすることの危険性を示唆する。すなわち、かれらの周囲にいる他者が、かれらの背景およびおかれている状況を考慮に入れず、「中国帰国児童生徒」に対するステレオタイプの理解を形成した場合、かれらの現実が見えなくなってしまうのである。

筆者のこれまでのフィールド調査から得られた知見—石川（2001）の表現を用いれば「局所的リアリティー」は、従来の「中国帰国児童生徒は～である」という単純な理解を覆すものである<sup>7)</sup>。しかしながら、このことは中国帰国児童生徒に関わる理解を拡散させるものではない—当然のことながら—ない。むしろ、石川（2001）がいうところの「一つの地図を作り上げていくという『対話的作業』」<sup>(10)</sup>のための必要な作業であるということができよう。

## まとめ

外国人児童生徒教育におけるアイデンティティについて、村田(2001)は次のように述べている。

(ブラジル、ペルーへ：引用者註) 帰国した子どもたちも、ほとんどペルー人、ブラジル人と思っ  
ているようである。……(中略)……親が明確にペルー人、ブラジル人であると認識して子どもに接  
し、母語やペルー、ブラジル文化を強調している家庭では、当然、子どももペルー人、ブラジル人  
としてアイデンティティが育つであろう。他方、親の態度が不明確な場合、子どももどっちつかず  
で、心理的、精神的に不安定になりやすいようである。

(村田・2001・156頁)

アイデンティティの面では、一つの文化、一つの国家への帰属感を持つことが必要ということであ  
ろう。こういう考え方に立てば、日本における外国人子女教育も工夫を要する。国際理解教育にお  
いて、外国人子女に日本の社会・文化の理解を促すばかりでなく、彼等の属する国籍や文化を自覚  
させることも大切な指導であろう。同時にアイデンティティに関して、同じブラジル人でも、ブラ  
ジル人、日本人、日系ブラジル人の考え方で揺れている現実がみられた。そのような多様な考え方  
を尊重するという態度も、基本的に重要であると思われる。

(村田・2001・159頁)

このような言説こそが外国人児童生徒に対する否定的な理解をもたらすのではないだろうか。す  
なわち、外国人児童生徒とは「どっちつかず」の存在であると決めつけ、日本やルーツとする国と  
いった国民国家とそれに対応する文化を措定し、それへの帰属を自明のこととするというものであ  
る。このような視点からは、日本への同化という圧力と、「彼等の属する国籍や文化」を自覚させ  
るという日本からの異化という圧力、といった二項対立的な構図のみが導かれるのである。このよ  
うな村田の主張は、アイデンティティを静的なものとして捉えていることに起因すると考えられる。  
このことは、下線部において「アイデンティティ」が「考え方」にすり替えられていることから  
読みとれる。すなわち、村田のような静的なアイデンティティの捉え方からは、「多様な」アイデ  
ンティティの存在とその表象、すなわち、外国人児童生徒たちの現状を探ることはできない。その  
ため、「アイデンティティに関して」という書き出しにもかかわらず、「考え方」という語を用いざ  
るを得なかったと考える。多様なアイデンティティという捉え方は、ホールが主張する、状況に応  
じて複数のアイデンティティのなかからアイデンティティを選択するという重層的なアイデンティ  
ティ概念によってはじめて可能になるのである。

また、文化および国家への帰属という点について、筆者が行っている中国帰国児童生徒に関する  
フィールド調査からは、文化や国家というよりはむしろ、自己(の表象)が他者からどのように認  
識されるかという点に焦点が当てられ、それにもとづきアイデンティティを選択する姿が浮かび上

がってきている。そして、動的なアイデンティティという視点に基づき、かれらの現実の姿―石川がいうところの「局所的リアリティ」―を描き出し「対話的作業」によって付きあわせることにより、かれらに「関わる」教育課題を解決していくことが求められるのである。

ここまで、ホールのアイデンティティ概念を軸として、外国人児童生徒教育研究における動的なアイデンティティ概念の持つ意味を考察してきたが、それをあらためてまとめると次のような点に集約されるであろう。

まず、国民国家とそれに対応する文化を措定し、それに対して統一的で安定したアイデンティティという幻想を放棄する必要性である。このような静的なアイデンティティ概念からは、二項対立的構図もしくは「日本人らしさ」の程度による捉え方という、「現実」を覆い隠すような構図しか生み出されない。ホールのアイデンティティの概念―状況に応じて複数のアイデンティティのなかからアイデンティティを選択するという重層的なアイデンティティ概念―は、統一的で安定した静的なアイデンティティ概念からの転換を迫るものである。同時に、そのような動的なアイデンティティ概念からは、外国人児童生徒たちのアイデンティティ形成を把握するために有効であると考えられる「アイデンティティ管理」や「存在証明」という視点が導き出されるのである。このように、ホールのアイデンティティ論は、「日本の『公教育』を、民族や国籍による『日本人』の教育ではなく、日本に居住する多様な背景を持った子どもたち―実質的な社会の構成員―の教育を意味するものへと変容させる」（岸田・2001）ための視点を提供するものである。このような視点から、かれらの現実の姿、言い換えれば局所的現実を描き出し、その集合体としての全体像を把握するという作業が必要とされているのである。

## 〈註〉

はじめに

(1) 拙稿、2002

(2) 本稿における「在日朝鮮人」とは、日本の植民地支配をその根本的な原因とし、その後も種々の事情により日本に在住する朝鮮半島にルーツをもつ人々を指す。一般的に用いられている「在日韓国・朝鮮人」を採用しなかった理由としては、本稿はいわゆる「日本人」とは異なる文化的背景を持つ人々のアイデンティティ形成を対象としており、「韓国」、「(北)朝鮮」という国家概念が無用な混乱を惹起するのを避けるためである。

(3) しかしながら、近年、(括弧付きの)「在日」や在日コリアンという呼称が広まりつつある。このような呼称の変化は、日本国籍取得(「帰化」)者が増加し、実態との整合性がなくなったためであろう。

(4) 福岡(1993・79頁)

### 第1章：

(5) ここで、外国人児童生徒教育と切り離せないのが、国民国家とアイデンティティを形成する個人の関係である。日本は他の先進諸国と比較した場合、比較的同質「的」な国家であるといえるであろう。ニューカマーの流入により「社会問題」として顕在化し認識されてきた日本社会の多文化化であるが、実際には、ニューカマーの流入以前からオールドカマーもしくはオールドタイマーとよばれる在日朝鮮人などが日本社会で生活している。しかしながら日本社会においては、現実的には、「単一民族国家」もしくは「同質国家」という神話が蔓延している。

### 第2章：

(6) 山脇 (2001・286頁)

### 第3章：

(7) 拙稿、2001a,2001b,2000参照

## [参考・参考文献]

- 蘭信三 1998年「パリアとしての中国帰国者」『「中国帰国者」をめぐる地域社会の受容と排除に関する比較社会学的研究』（平成7年度～平成9年度科学研究費補助金研究成果報告書） 蘭信三（研究代表者） 1頁-7頁
- 2000年「パリアとしての中国帰国者」『「中国帰国者」の生活世界』 蘭信三編行路社 1頁-15頁
- 石川准、1992年、『アイデンティティ・ゲーム 存在証明の社会学』、新評論
- 、1996年、『アイデンティティの政治学』、『差別と共生の社会学』、171-185頁、岩波書店
- 、2001年、『マイノリティの言説戦略とポスト・アイデンティティ・ポリティクス』、梶田孝道編、『国際化とアイデンティティ』、153頁-181頁、ミネルヴァ書房
- 上野俊哉／毛利嘉孝編、2000年、『カルチュラル・スタディーズ入門』、ちくま新書
- 押見輝男、1990年、『「自己の姿への注目」の段階』、中村陽吉編、『「自己過程」の社会心理学』、21頁-65頁、東京大学出版会
- 岸田由美、2001年、『在日韓国・朝鮮人教育—共生教育的観点からみた発展と課題—』、天野正治／村田翼夫編、『多文化共生社会の教育』、132頁-144頁、玉川大学出版部
- 清田祥一、1999年、『中国帰国生徒の学校における準抛集団について—学校における言語集団という視点—』、『中国帰国孤児定着促進センター紀要』 第7号、中国帰国孤児定着促進センター編、188頁-203頁
- テイラー・C、1994/1996年、佐々木毅他訳、『承認をめぐる政治』、ガットマン・A編、『マルチカ

- ルチュラリズム』、37頁-110頁、岩波書店
- 中村陽吉、1990年、「自己過程」の四段階」、中村陽吉編、『自己過程』の社会心理学』、3頁-20頁、東京大学出版会
- 沼崎誠、2002年、「自己概念」、船津衛・安藤清志編、『自我・自己の社会心理学』、78頁-95頁、北樹出版
- 福岡安則／金明秀、1997年、『在日韓国人青年の生活と意識』、東京大学出版会
- 福岡安則、1993年、『在日韓国・朝鮮人ー若い世代のアイデンティティー』、中公新書
- 福岡安則／辻山ゆき子、1991年、『同化と異化のはざままでー「在日」若者世代のアイデンティティ葛藤ー』、新幹社
- 福島智、2002年、「中国帰国児童生徒教育研究の現状と今後の課題」、『飛梅論集』、九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻教育学コース、147頁-161頁
- 、2001年a、「中国帰国生徒の自己認識に関する一考察ー生徒のライフヒストリーからー」、『国際教育文化研究』、九州大学大学院人間環境学研究院国際教育文化研究会、51頁-60頁
- 、2001年b、「福岡市A中学校における日本語教室と担当教師の役割ー中国帰国生徒と担当教師の視点からー」、『九州教育学会研究紀要』第28巻
- 、2000年、『中国帰国生徒のアイデンティティ形成に関する研究ー福岡市A地域における帰国生徒の調査からー』、九州大学大学院人間環境学研究科修士論文
- ホール・S、1996/2001年、宇波彰訳、「誰がアイデンティティを必要とするのか?」、スチュアート・ホール/ポール・ドゥ・ゲイ編、『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』、7頁-35頁、大村書店
- 、1996/1998年、大熊高明訳「ニュー・エスニシティーズ」、『現代思想』第26巻第4号、80頁-89頁
- 、1990/1998年、小笠原博毅訳、「文化的アイデンティティとディアスポラ」、『現代思想』第26巻第4号、90頁-103頁
- マクロビー・A、1994/1998、木村真紀訳、「フェミニズム、ポストモダニズムと「本当の私」」、『現代思想』第26巻第4号、129頁-141頁
- 宮田幸枝、1998年、「中国二世三世と教育ー中学校の日本語学級に居心地を見出す問題ー」、『中国帰国者』をめぐる地域社会の受容と排除に関する比較社会学的研究』（平成7年度～平成9年度科学研究費補助金研究成果報告書）、蘭信三（研究代表者）、34頁-45頁
- 村田翼夫、2001年、「外国人子女教育ー帰国後の再適応問題を考慮してー」、天野正治/村田翼夫編、『多文化共生社会の教育』、145頁-163頁、玉川大学出版部
- 山脇啓造、2001年、「戦後日本の外国人政策と在日コリアンの社会運動ー1970年代を中心にー」、梶田孝道編、『国際化とアイデンティティ』、286頁-318頁、ミネルヴァ書房

## **A Study about Identity in “Foreign Students’ Education”**

**—Japanese-Chinese Students and Korean residents’ Students—**

**FUKUSHIMA Tomo**

This study is trying to get a perspective of identity constitution on Chinese-Japanese students from China (originate in “Chugoku-Zanryu-Koji or Chugoku-Zanryu-Fujin”) and “Zainichi” students (originate in Korean Residents in Japan). Whereby, I consult Hall’s disquisition(1990/1998, 1996/1998, 1996/2001) and Ishikawa’s disquisition (1992, 1996, 2000). These disquisitions acquire below :

- I . One’s identity is never static, rather than having dynamism. From this point of view, one’s identity is always on constituting “process”.
- II . Identity constitution is “dialogitic” proses. From this point of view, one’s identity constitution is never separated from others’ effort.
- III . And we must drop the idea that “Identity is united and coherent”.
- IV . One’s identity should be free from “Nation States” and “Cultures based on Nation States”.

Therefore, studies of education about (not “for”) foreigner students in Japan must illustrate “whole aspct” (Ishikawa:2001) by uniting “localized aspects” (Ishikawa:2001) from these perspectives.